

「海外フィールド演習ベトナムプログラム」の取り組みと意義

—2013 年度・2014 年度の経験—

筒井一伸*・小玉芳敬**・仲野 誠*・菅森義晃**・
ブイ ティ トウ***・レ ディン トウアン***・チュオン ディン チョン***

A report on the Activities and Significance on "Overseas Fieldwork in Vietnam"
in 2014 and 2015

TSUTSUI Kazunobu, KODAMA Yoshinori, NAKANO Makoto, SUGAMORI Yoshiaki
Bùi Thị Thu, Lê Đình Thuận, Trương Đình Trọng

キーワード：インターリージョナル，海外地域調査，地形調査，集落調査，地質調査

Key Words: Inter-Regional, Fieldwork in foreign countries, Geomorphological research, Community Research, Geological survey

I はじめに

地域学部では①地域学部学生および教員の国際交流の推進，②地域を見つめる目の複眼化と地球地域学という発想の醸成，③北東アジア研究の推進，を背景に，2010年度の韓国・江原大学校における実習（田川・永松，2010）を皮切りにして「海外フィールド演習」の試行錯誤を重ね，2013年度のカリキュラム化を経て正式科目としてスタートした。「海外フィールド演習ベトナムプログラム（以下，ベトナムプログラム）」はパイロットプログラムを2011年度，2012年度の2か年度実施（筒井ほか，2012；筒井ほか，2013）した上でのスタートとなったが，回を重ねるごとに新たな意義を認識するとともに課題も見出ししてきた。本稿では2013年度と2014年度のベトナムプログラムの取り組みと意義について紹介する。

ベトナムプログラムは，ベトナム中部のトゥアティエンフエ省（tỉnh Thừa Thiên - Huế）フエ市（Thành phố Huế）にあるフエ科学大学を拠点に行っている。フエ科学大学（College of Sciences, Hue/Trường Đại Học khoa học Huế）はフエ大学（Hue University /Đại Học Huế）に属する大学で，具体的なベトナムプログラムの実施カウンターパートは，筒井が研究協力関係を持つ地理地質学部が担っている。2013年度と2014年度のベトナムプログラムでは，集落社会グループと集落資源グループが2012年度のパイロットプログラムと同様にフーヴァン県（huyện Phú Vang）フルオン行政村（xã Phú Lương）レーサーチュン村（thôn Lê Xá Trung）を中心にフィールド演習を行った。一方，自然環境グループは調査対象地域をよりテーマに則したものにするため，小玉が担当した2013年度の地形調査ではフーヴァン県内の砂州海岸を，菅森が担当した2014年度の地質調査ではフエ市内およびフオンチャー県（huyện Hương Trà）を中心にフィールド演習を行った（図1）。

*鳥取大学地域学部地域政策学科

**鳥取大学地域学部地域環境学科

***フエ科学大学地理地質学部

大変有効であった（筒井ほか，2013）が，年度末の業務が多い中で帯同職員を確保することが難しかったため，ティーチングアシスタントを配置して体制を整えた。

2014年度は2015年2月27日から3月8日まで実施した。日程は表4の通りであるが，航空券手配の関係で日本からベトナムへのフライトは2つに分かれることとなった。参加者は4名（表5）と少人数であったため引率教員を2名とし，自然環境グループの担当が菅森に変更となった。自然環境グループ（担当：菅森）はフエ市周辺に露出する基盤岩を観察することで，人文現象の基礎となる大地の成り立ちおよび環境を明らかにすることを目的に，集落資源グループ（担当：筒井）は前年と同様に農村集落の住民への面接式の質問票調査（メンタルマップを含む）を行い，地域住民が認識している地域課題の実態を調査することを目的とした。フエ科学大学は教員を含めて8名での対応となった（表6）。

表4 2014年度海外フィールド演習スケジュール

日付	行程
2015年2月27日	チャイナエアラインCI159 関西国際空港10:00 台北12:20 チャイナエアラインCI9123 台北13:25 ハノイ15:40 ベトナム航空VN331 関西国際空港10:30 ハノイ13:55* 宿泊：Hanoi Hibiscus Hotel
2015年2月28日	午前：ハノイ市内エクスカージョン 午後：ハノイ市内エクスカージョン ベトナム航空VN1545 ハノイ17:40 フエ18:50 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月1日	午前：フエ科学大学にてレクチャー 午後：フィールドエクスカージョン ウェルカムパーティー 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月2日	全日：フィールド演習 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月3日	全日：フィールド演習 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月4日	全日：フエ科学大学にてフィールド演習結果の中間ディスカッション 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月5日	全日：テーマエクスカージョン トゥアティエンフエ省アールオイ県（自然環境グループ） クワンナム省ノンソン県ソンビエン行政村（集落資源グループ） 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月6日	全日：フエ科学大学にてフィールド演習結果のとりまとめ 宿泊：Nguyen Hue Hotel
2015年3月7日	午前：フエ科学大学にて報告会 午後：レーサーチュン村にて報告会 夕方：レーサーチュン村の人たちと交流会 ベトナム航空VN1379 フエ21:10 ホーチミンシティ22:30 宿泊：Tan Son Nhat Hotel ベトナム航空VN300 ホーチミンシティ00:30 成田国際空港07:45*
2015年3月8日	チャイナエアラインCI782 ホーチミンシティ11:05 台北15:20 チャイナエアラインCI158 台北17:25 関西国際空港20:50 ピーチアビエーションMM316 成田国際空港14:25 関西国際空港15:55*

※*印はチャイナエアライン航空券が購入できなかった学生の代替フライト。

表5 2014年度の参加学生

所属	性別	学年	調査グループ
1 地域環境学科	男	2	自然環境
2 地域環境学科	男	2	自然環境
3 地域政策学科	女	3	集落資源
4 地域政策学科	女	2	集落資源

表2 2013年度の参加学生

所属	性別	学年	調査グループ
1 地域環境学科	女	2	自然環境
2 地域環境学科	男	2	自然環境
3 地域環境学科	男	2	自然環境
4 地域政策学科	男	2	集落社会
5 地域教育学科	女	3	集落社会
6 地域文化学科	女	2	集落社会
7 地域政策学科	男	2	集落資源
8 地域政策学科	女	2	集落資源

表3 フエ科学大学の2013年度参加者

所属	性別	身分	調査グループ
1 地理地質学部	男	講師	自然環境
2 地理地質学部	男	講師	自然環境
3 地理地質学部	女	学部3年生	自然環境
4 地理地質学部	男	学部2年生	自然環境
5 地理地質学部	男	修士学生	自然環境
6 地理地質学部	男	学部3年生	自然環境
7 地理地質学部	女	講師	集落社会
8 地理地質学部	男	学部3年生	集落社会
9 地理地質学部	女	学部2年生	集落社会
10 地理地質学部	男	学部1年生	集落社会
11 地理地質学部	女	講師	集落社会
12 地理地質学部	男	講師	集落資源
13 地理地質学部	女	学部3年生	集落資源
14 地理地質学部	女	学部2年生	集落資源
15 地理地質学部	男	学部3年生	集落資源

表6 フエ科学大学の2014年度参加者

所属	性別	身分	調査グループ
1 地理地質学部	女	講師	自然環境
2 地理地質学部	男	学部3年生	自然環境
3 地理地質学部	男	学部3年生	自然環境
4 地理地質学部	男	講師	集落資源
5 地理地質学部	女	講師	集落資源
6 地理地質学部	男	学部2年生	集落資源
7 地理地質学部	女	学部2年生	集落資源
8 地理地質学部	男	学部2年生	集落資源

調査項目は、海浜の縦断測量と地形区分、砂浜堆積物の粒度分析、波の砕波状況の観察、そして海浜表面の温度計測であった。縦断測量では、携帯型光波測距儀（Laser Technology社製の Tru Pulse 360）を用い、汀線から地形傾斜の変換点毎に計測し、縦断図を描くと同時に地形要素を判別した。海浜堆積物に関しては、地形要素毎に表面の砂を採取し、0.063 mm (4 φ) ~ 4 mm (-2 φ) でφ間隔にそろえた篩と 0.1 g 精度の電子秤を用いて、現地で分析した。そして中央粒径を算出した。波の砕波状況からは、沿岸砂州の存在を推察した。沿岸砂州などで水深が浅くなったところで波が砕けるためである。また赤外線温度計を用いて、地形要素毎に砂浜表面温度を 10 点ほど計測し、それぞれ平均値を求めた。



写真 1 浜にあげられた
伝統的な漁船

3. 調査結果および考察

a. 海浜の縦断測量からみる地形の沿岸変化

A から F 地点における縦断測量の結果を図 5 に示す。A から C 地点では、汀段（berm）地形が 2~3 段認められ、その内陸側では白砂で構成される浜堤列（beach ridge）へと続いていた。これらの標高は、2~4 m と比較的低平であった。また berm III や beach ridge では一部に比高 50 cm~1 m ほどのドーム砂丘が観察された。いっぽう、D から F 地点では汀段が 1 段あるいは 2 段しか観察されず、その内陸側では標高 6 m 以上の砂丘地へと続いていた。

これらの地形配列を模式的にまとめ図 6 に示した。砂丘が発達する南東側の沿岸部では、砂丘が beach ridge や berm の空間を占領して、その結果砂浜の奥行きが狭くなっていることが確認された。

b. 海浜堆積物の中央粒径

地形要素毎に求めた中央粒径の沿岸変化を図 7 に示した。多くの地点で berm II, berm III, 浜堤列、そして砂丘砂の中央粒径は 0.4 mm 前後で類似した値を示した。Berm I に注目すると調査範囲の南北では 0.6 mm ほどであったのが、中央の D 地点では 1 mm と粗くなっていた。このことが漂砂の方向性とどのように関わっているのか、にわかには判断しがたいが、混合粒径における粗粒子の易動度の上昇を考慮すると、D 地点に向けて南北からの漂砂が推定される。海岸線伸張方位の変換点が D 地点付近に存在する理由と関連する。



図 4 調査海岸の位置図

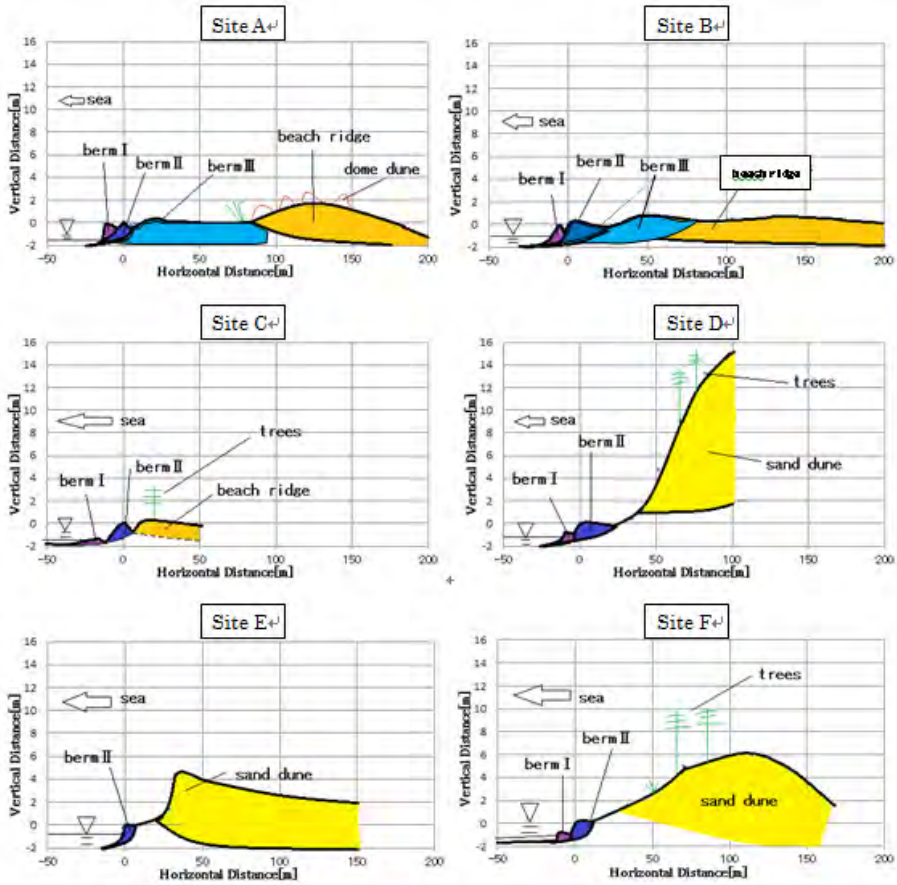


図5 海岸縦断形と地形要素の判別

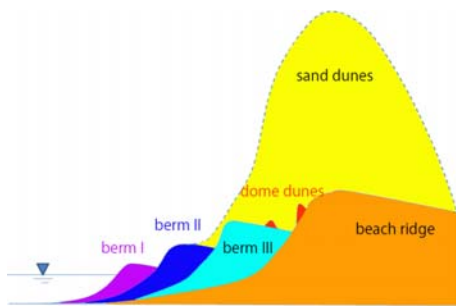


図6 ベトナム中部における海岸縦断形の構成要素模式図

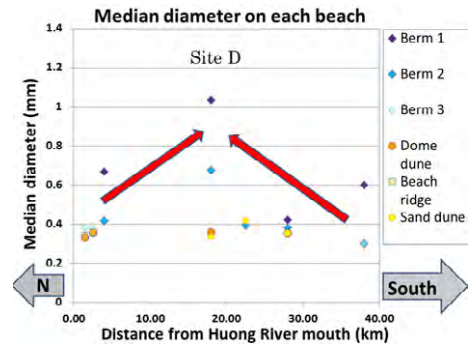


図7 海岸堆積物の地形要素に応じた中央粒径変化

c. 沿岸砂州の東西変化

波の砕波状況は南北方向で系統的に変化した。図 8 に代表されるように、北側では汀線近傍のステップ地形のところでのみ砕波し、沖合には砕波が見られなかったのに対して、南側に向かうにつれて砕波列の数が明らかに増えた。南側では 2 列の沿岸砂州とステップ地形の存在が推定された。これらのことは、浅海底に存在する砂の量、特に細粒砂の量が調査区間の南側で豊富であることを示唆する。

d. 砂表面温度の多様性

調査海岸において、地形要素毎に砂表面温度を計測した結果を図 9 にまとめた。それぞれの海岸断面において、砂表面温度には大きな差違が認められた。たとえば C 地点ではわずか 25m 程離れた地点で 16°C と 31°C といった具合に 15°C の差違が存在した。また berm の範囲では波がかかる波打ち際から内陸側にかけて温度の上昇傾向が認められたが、いっぽう浜堤列や砂丘区間では内陸に向けて温度の下降傾向を示した。このように砂表面の温度環境には短い距離の中に多様性が認められることが明らかとなった。

4. まとめ

調査区間の海岸には南北で地形景観に差違が認められた。海浜部が広く占める北側と砂丘が海浜部にせり出している南側である。沿岸砂州の発達上状況も考慮すると浅海底にある砂の量は南側ほど豊富であると推定された。沿岸漂砂は北側から中央（D 地点付近）に向かう流れと南の岩石海岸から中央に向かう流れの 2 つが推定された。3 日間の現地調査実習であったが、このように多くの知見が得られた。将来にわたり、このようなすばらしい海浜環境が持続することを願いたい。

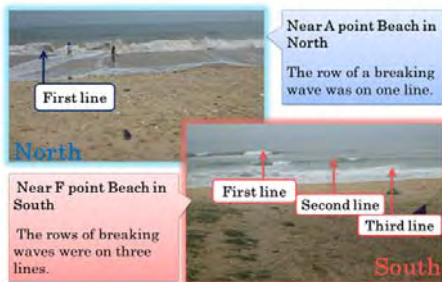


図 8 調査地域における砕波の状況

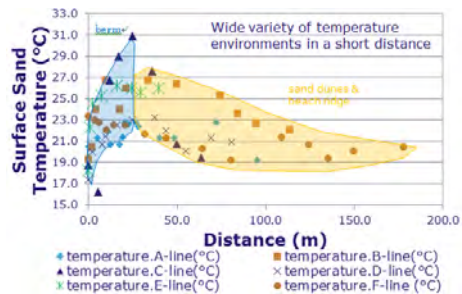


図 9 調査海岸の海岸地形要素に応じた砂表面温度の分布

IV 自然環境（地質）に関する調査プログラム

1. 自然環境（地質）調査の概要

自然環境（地質）グループはフエ近辺に露出する地層・岩体の基本的な地質調査を行った。野外では岩石記載だけでなく節理や小断層、岩脈の姿勢などについて記載・測定し、室内作業では偏光顕微鏡で岩石を観察するために必要な岩石薄片の作成を行った。以下では調査内容等を日にち毎に記載する（表 7）。

2. 調査等の状況

a. 初日 (3月)

フエ科学大学の教員によるベトナムの地理学および地質学的事項を、プレゼンテーションソフトを用いて説明いただいた。地質学分野については、短くまとめられていたが、専門用語が多く、国籍を問わず、地質学を専門としない学生にとっては難解なものだったと思われる。説明が終わった後、グループに分かれて打ち合わせを行った。自然環境(地質)グループはフエ科学大学の教員1名、フエ科学

大学の学生2名、地域学部の学生2名、および筆者(菅森)で構成される。打ち合わせでは日越のクリノメーターの違いやその使い方について確認しあった(写真2A)。

午後からはコミュニティグループおよび地質グループの調査地の一部を全員で見学した。地質学分野では、高速道路沿いに露出するデボン紀とされる砂岩・泥岩を観察した。その後、採石場で白亜紀の花崗岩とそれを貫く岩脈を観察した。筆者はベトナムへの訪問が初めてであり、さらに温暖・多雨な気候がもたらす強い風化の影響がどの程度なのかかわからないでいたが、露頭の露出状況についてこの日に大まかに理解した。

b. 2日目

前日に訪れた砕石場で白亜紀の花崗岩の記載と花崗岩に発達する節理、小断層の記載、安山岩質の岩脈の記載をおこなった(写真2B)。赤道に近いので、昼に近づくると採石場内では影がなくなり、非常に暑い。昼を過ぎると気温が上がるため、午後からの調査をあきらめ、フエ科学大学で採取したサンプルの岩石薄片の作成に取り掛かった(写真2C)。

フエ科学大学の岩石薄片を作成するための高価な設備は、一次切断用岩石カッター1台、研磨機が2台備わっていた(写真2D)。研磨した岩石チップをスライドガラスに張り付けるための接着剤は筆者がよく利用する日本製のものであり、フエ科学大学の教員が日本から買って帰ってきたものとのことであった。

ただし、スライドガラスに張り付けた岩石チップを薄く切断する2次切断用のカッターは設置されておらず、そのため、岩石チップの形状を薄くするか、長時間かけて研磨する必要がある。なお、鳥取大学での岩石薄片作成設備については、赴任当初(2014年4月)は二次切断用岩石カッターが1台、研磨機が1台のみであり、フエ科学大学との設備差はそれほどない状況であったが、日本国内での地質分野のそれらと比べると貧弱である。2014年度に新たに一次切断用岩石カッターを1台購入し、鳥取大学での状況は改善しつつある。

表7 自然環境(地質)調査の日程

日時	実習内容
3月1日	
10:00~11:00	ベトナムの地理学および地質学に関するレクチャー
11:00~12:00	各グループで打ち合わせ
14:00~17:00	巡検
3月2日	
AM	採石場で花崗岩および岩脈の観察
15:00~18:30	岩石薄片の作成
3月3日	
9:00~18:00	A Luoi 地域への調査
10:10~11:40	片麻岩と安山岩質岩脈の観察
13:30~14:30	結晶片岩の観察
14:40~15:15	片麻状花崗岩の観察
16:15~16:30	苦鉄質片岩の観察
3月4日	
9:00~13:00	デボン紀の砕屑岩の観察
16:00~19:00	岩石薄片の作成
3月5日	
9:00~11:00	岩石薄片の作成
11:00~12:00	発表の打ち合わせ
3月6日	
9:00~18:00	発表のスライドの作成
3月7日	
9:00~13:00	発表スライドの作成・発表の準備
14:00~16:05	報告会

c. 3日目

この日の調査は前日案内していただいた教員の都合で参加できず、地理学教室と地質学教室の教員がアシスタントとして加わった。地質学のトレーニングにとって重要なことは多くの露頭を観察することであり、筆者の希望もあって、露頭が良いと思われる山岳地帯まで足を延ばしていただいた。露頭を観察した場所はフエの市街地から約 50 km 西方の A luoi 地域であり、バスで片道およそ 2 時間半～3 時間の道のりであった。まず、午前中に片麻岩を観察した。露頭では片麻岩の片麻状構造を観察し、その構造の測定を行った。さらに、片麻状構造を明瞭に切る安山岩質岩脈を観察し、それらの形成順序を学生に考察してもらった（写真 2E）。また転石で、片麻状構造を切る石英脈、石英脈を切る安山岩質岩脈を含むものがあり、この転石からも岩石の形成順序を考察してもらった。これらは交差の法則（切ったものは切られたものより新しい）を学ぶ良い機会となった。

昼食を挟み、強く風化した結晶片岩を観察した。結晶片岩はほとんどがカオリナイトに変質しており、低緯度地域における風化作用の強さを見せつけられた。その後、近くの採石場で片麻状花崗岩を観察した。ここでも弱い片麻状を呈する花崗岩を観察し、その構造を測定した。帰り道に道の切り通しに露頭があったので、ここでも露頭を観察した。この露頭では苦鉄質片岩を観察した。ただ、車が多く、蛭も多かったため、観察は早めに切り上げた。

d. 4日目

この日は2日目と同じメンバーで初日に見た高速道路沿いのデボン紀の砂岩・泥岩互層を観察した。この地層は紫色～白色を呈し、弱い変成作用や変形を受けており、典型的な堆積岩ではなかった（かといって変成岩でもない）。特にこれまでに日本で整然とした地層を見てきた日本人学生にとって難解であったように思われる。ここでは主にフエ科学大学の教員が英語で露頭説明および観察方法の説明を行った（一部、筆者と意見が食い違うところもあった）。母国語であっても言葉だけでは説明が難しいことが多く、絵を用いて説明する時には、日本の百円ショップで購入したホワイトボードが非常に有用であった（写真 2F）。昼からは2日目と同様に岩石薄片の作成に費やした。

e. 5日目

この日の午前中も岩石薄片の作成に費やし、何枚かは失敗したものの、合計4枚の薄片を作成できた。本来なら完成した岩石薄片を観察してもらおう予定だったが、機器の調子が悪かったため、それは断念した。その後、翌々日に控えた発表のための準備に入った。フエ科学大学の教員からの提案で、それぞれパワーポイントファイルを作成し、その中で良いものをピックアップして最終的なプレゼンを作成させようとした。午後はフエ科学大の学生が日本人学生をフエの街に連れて行き、街をガイドした。

f. 6日目・7日目

この日は終日発表準備に充てた。個々人で作業をやっていたため、あまり共同で作業をすることはないように見えた。16時になる直前に発表内容を分担して作成しようと日本人学生から提案があり、分担して作成することになった。この時から、学生同士共同で作業をしようとする行動が見てとれ、お互いに英語が堪能でない中、ホワイトボードを使ってコミュニケーションをとるようになっていた（写真 2G）。この後、発表当日の7日目の午前中にかけて急ピッチで発表の準備が進められた。そして、午後に今回の調査で観察した事柄を発表した。



写真2 ベトナムでの自然環境調査（地質）グループの活動の状況

A: クリノメーターの使い方を確認しあう学生。B: 採石場での露頭観察。花崗岩に貫入する安山岩質の岩脈が認められる。C: フェ大学での岩石加工室で岩石薄片を作成する学生。D: 岩石加工室に設置されている一次切断用岩石カッター（左端）および研磨機。E: 片麻岩と安山岩質岩脈。F: デボン紀の弱変成碎屑岩の前でホワイトボードを使って説明するフェ大学の教員とそれを聴く学生。G: 発表用のスライドをPCで作成する学生。ここでもホワイトボードが活躍している。

3. 全体を通して

事前にフエ周辺の地質の資料をフエ科学大学の教員からいただいていたが、「百聞は一見に如かず」という言葉が示す通り、フエの地質を理解するには現地に行って実際に岩石を観察することが何よりも重要である。日本人学生には上述の資料を訳してもらい、その内容を発表してもらったが、結果的にその内容が十分とは言えず、英語の岩石名がわからないままであったり、その岩石がどういう場で形成されていたと考えられるかということが理解できていなかったりしたため、現地で苦労することになった。この点は引率教員の反省材料である（これらを理解してもらうためには新たに15コマ分の授業を展開せねばならないという課題が生じるが）。また、今回観察した露頭は、日本から参加した学生が調査実習で行った内容（池内ほか，2015；菅森ほか，2015）とは大きくかけ離れており、さらに鳥取ではあまり目にしない露頭状況や岩石であったのは、学生にとっては不運であったかもしれない。だが、普段の鳥取や日本では目にしにくい、ない目にできない露頭・岩石を観察できたのは幸運ともいえる。

筆者はかつて大学1年生の時にインドの地質を観察したことがある。“幼くして”日本のような変動帯とは大きく異なった風景・スケールと出会えたことは今でも印象深く残っており、現在の専門にも活かされている。今回の経験が学生の胸に刻み込まれ、彼らの今後の人生に活かされることが期待される。また、露頭の露出状況が悪い中、フエ科学大学の教員の方々には今回のプログラムのための露頭選定、調整には心を砕いていただいたことを忘れてはならない。

V 集落社会グループにおける質的調査の訓練

1. この調査の訓練の目的

この海外フィールド演習の集落社会グループの学生たちは、質的フィールド調査の訓練に焦点を絞った。その主な目的は、ベトナムの集落での質的調査の実験的な経験を積むことであった。

実質的にこのフィールド演習で、全体でのフィールドワークを除いて集落社会グループの調査の訓練にのみ費やすことができる時間は、2、3日のみであったため、質的調査の全般的な訓練を試みることはしなかった。なぜならば、そのような短い期間で質的調査全般を学ぶことは大変困難であり、ややもすればせつかくの訓練が断片的な、あるいは中途半端なものに終わってしまう恐れがあるからである。大変貴重な海外での質的調査の訓練であるから、基本的な学習を大切にしたい。

今回のプログラムでは、調査者自身にとって意味のある問いを立てる訓練の経験をするを目的とした。この問いは、いうまでもなく他の誰かにとっての問いではなく、調査者自身にとって大切な問いのことである。よってこれは調査者にとって興味深く、意味のあるものでなければならず、同時に公共的な課題を包含するものでなければならない。

いうまでもなく、自分自身を問い立てたとしても、それだけでは調査者は調査全体の初発あるいは中間的な段階にいるにすぎない。しかしながら、この初発の段階は自分自身の調査を開始するために大変重要なものである。

2. 調査のアウトライン

通常、質的調査の主な方法はインタビューと参与観察である。これらの方法を使うことによって、「社会的事実」あるいは「主観的事実」を記述し、それらを分析するための質的なデータを得ることができる。

一般的に量的調査においては科学的事実を記述し、そして現象の因果関係を分析するという手法

がとられる。これは一般的に科学的といわれる調査手法であろう。

一方、質的調査においては、質的データによってものごとの記述と分析が行われる。これは「社会的事実」と呼ばれるもので、ある意味「科学的事実」とは区別される。科学的事実は科学的根拠にもとづかなければならない。一方、社会的事実は必ずしも科学的根拠に基づいていない。W.I. トマスとD.S. トマスが述べたように、「もしひとが状況を真実（リアル）であると決めれば、その状況は結果においても真実（リアル）である」ということだ。これはトマスの定理としてよく知られている。

たとえば、ある村においてその成員たちが死者の魂の存在を信じていればそこに魂は存在することになり、たとえば、その村では死者のためにさまざまな儀式が執り行われるなど、一般的には人びとの暮らしはその信仰の基盤の上につくられるだろう。

これを科学的データを示すことによって迷信だということもできるかもしれない。しかしながら、そのコミュニティの成員たちが死者の魂の存在を疑いもなく信じるのであれば、それは人びとの間に社会的事実として存在するのである。社会的事実という観点から人びとにとつてのリアリティを理解しようとすれば、世界は違って見えるかもしれない。

よって、社会的事実を数量的データを使用して客観的に記述することは困難であることが多い。社会的事実を描くためには質的データを使用することが有用である。

インタビューと参与観察法によるデータ以外では、日記、写真、手紙、雑誌、映画なども分析対象となることがある。ただし、今回の実習では、時間の制約があるために参与観察とインタビューのみを使用することにした。

3. 訓練の内容と結果

上述のとおり、この訓練ではインタビューが主な調査方法である。この実習に参加した日本人学生のなかにはベトナム語を話す者はおらず、ベトナム語から英語への通訳が大変重要な作業となった。英語でコミュニケーションをとるのは双方の学生たちにとって大変難しいことであったが、それは調査を成立させるための大きな助けとなった。このような言語上の理由もあり、集落社会グループはさらに小さなサブグループに分けられて調査の訓練を実施した。

ひとつのサブグループは2人から3人の学生で構成され、日本人とベトナム人双方の学生を含むものにした。こうすることにより、調査地のベトナムの村の住民の方々にインタビューすることが可能となった。

まず学生たちは調査地を歩き回り、初発の素朴な疑問をもつようにした。これらの疑問はシンプルなものである。往々にして、素朴な疑問は日本人学生の側から発せられた。もちろん、ベトナム人学生も調査対象地域のエクスカージョン中に多くの問いを提起しようとした。しかし、ベトナムを初めて訪れた日本人学生の目にはベトナムの村で見るほとんどすべてのものが新しく、そのために彼／彼女たちの初発の疑問がさらに深い問いを立てるための疑問として採用される傾向が強かった。換言すれば、調査地で見えるものはベトナム人学生にとっては必ずしも新しいものではなく、当然のごとく存在するものであったために、彼／彼女らにとって、素朴な疑



写真3 ベトナムの村で地元の住民にインタビューする日本人学生とベトナム人学生

(2014年3月3日)

問を発することは日本人学生以上に難しかったと思われるということだ。

過去のプログラムでは、日本人学生は次のようなテーマに関心をもった。ベトナム人の家族、家庭の仏壇、地域の小規模商店、ベトナム人の笑顔などである。これらの「テーマ」は地元の人たちにとってはなんら特別に関心を引くことではないだろう。しかし、ベトナムをはじめて訪れた日本人学生にとってはこのような日常的なことがとても興味深く、特別なことに思われたのだ。一方で、それらがなぜ興味深いことなのか、ベトナム人学生には理解しがたいことでもある。なぜならば、それはベトナム人にとってはきわめて日常のことであり、まったく珍しいことではないからだ。

次の段階では、学生たちは地元の人たちに多くの質問をすることになる。それは初発の素朴な疑問をより確かなものにしたり、それをより具体的な問いに仕上げていくためである（写真3）。そうするためには人びとへのインタビューをとおしてより多くのデータを集める必要がある。

これらのステップは、このプログラムにおいては2、3日かけた。より本格的な調査プロジェクトでは、これはより時間のかかることである。しかし、今回は質的調査を経験することが目的であり、時間的余裕もなかったのをこれを2、3日で実施することとなった。

ふたつの調査スタイルを比較してみよう。「図10」においてこのプログラムで試みたのは「スタイルB」の調査スタイルである。

既に述べたように、過去のプログラムにおいて、日本人学生はベトナム人家族の関係、親族の仏壇、地域の小規模商店の経営、ベトナム人の笑顔などに関心を示した。

当初は、学生たちは研究対象としてのベトナム社会を分析しようと思っていたようだ。しかし、興味深いことに、このプログラムが進行するにつれ、ほとんどの場合、学生たちの研究対象は少しずつ変化していく。当初はベトナムの暮らしが研究関心であった。学生たちは自分たちとは「異なるもの」を調査しようとしていた（図11）。

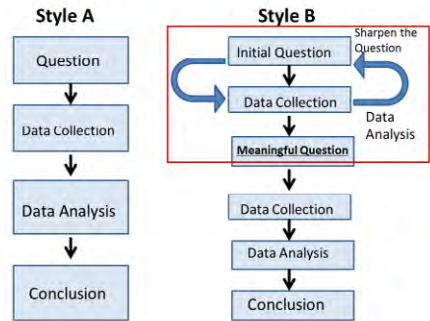


図10 ふたつの調査スタイル

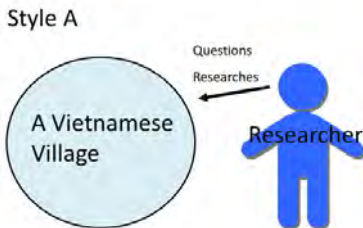


図11 調査者は自分の調査対象を問う

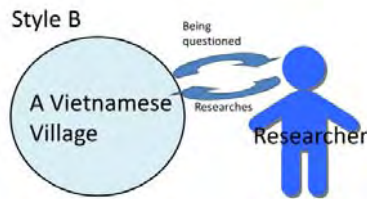


図12 調査者は自身の調査対象から問われる存在でもある

しかし、調査が進むにつれ、結果的に学生たちは日本社会に関することこそが自分にとっての意味のある問いであることに気づくようになっていく。それは、当初は研究対象であったベトナム社会が鏡となって、そこに映し出される自分自身のことや日本社会が研究対象に転化するということ

だろう。ベトナム人の家族を考えることは、日本の学生にとっては日本にいる自分自身の家族のことを考える貴重なきっかけになるようだ。

そのような日本人学生とともに研修をすることは、ベトナム人の学生にとっても日本とベトナムの社会の相違に気づかされる貴重な経験になる。そしてそれはベトナム人の学生があまり注意を払ってこなかった日本社会が抱える今日的で現実的な問題を知るというきっかけでもある。そのような相互作用を通じて学生たちは互いの世界観の相違についても学ぶきっかけを得る。それは自分自身が生きている社会のリアリティを再発見することにもつながる。

以上のように、このプログラムでは学生たちは自分の調査対象を問うことになるのだが、同時にそれはその調査対象から自分自身が問われるという経験でもある(図12)。この経験は調査者自身に新たな気づきをもたらすことになる。

VI 地域を“見える化”する—集落資源グループのプログラム

1. 調査におけるトレーニングの基本的な考え方

このグループはレーサーチュン村の人々が普段の生活で感じている社会環境、および日本とベトナムの学生が感じた地域の特徴を地図を介して“見える化”する作業を通じて、日本人学生、ベトナム人学生、ベトナム農村の地域住民の相互がコミュニケーションをとる経験を積むことを目的とした。コミュニケーションは、通常は英語といった言語に頼りがちであるが、地域の現場に出ることで発見できる事物や人物といった地域資源、そしてそれらの有機的秩序として認識される景観の表現を、地図などを用いて空間的に表現することで、“もう一つの共通言語”としてコミュニケーションに活かすことを試みた。

ベトナムプログラムの特徴は、日本人学生とベトナム人学生が英語でディスカッションをしながら調査準備を進め、現場ではベトナム人学生が日本人学生と地域住民の間にたつて、英語とベトナム語の通訳を行うことである。しかしながら地域に出る前にベトナム人学生も日本人学生との準備を通じて調査の内容を把握しているため、場合によっては日本人学生が関与せずともベトナム人学生と地域住民との間でベトナム語のみでのコミュニケーションによる調査が進んでしまう可能性があり、日本人学生の調査の現場感(参加感)が薄まってしまう。この課題に対応するために考え出されたのが、地図などの空間表現を“もう一つの共通言語”として用いる調査スタイルである。

2. 調査の概要

a. メンタルマップを用いたむらの高齢化調査—2013年度プログラム

2013年度はパイロットプログラムで行ったメンタルマップを用いた調査プログラムを踏襲した。レーサーチュン村に住む住民の人々がどのように集落を認識しているのか、メンタルマップの手法で調査をしてその特徴を明らかにする。まず集落を歩いて学生なりに気付いたところ、特徴的なところを見つけ出して白地図に書き込んでいき、自分たちの集落地図をつくる。そして地域住民の方々のメンタルマップと自分たちの作った集落地図の違いを検討する。

メンタルマップとは、元々はある種の価値対象に対して地域ごとの選好状態を地図化したものであるが、人びとが周囲の環境をいかに認知しているかを地図化した認知地図もメンタルマップと呼ばれる。メンタルマップは自由に思い浮かんだ地図を描画させる方法や、課題に沿って順序を追って描画させる方法が挙げられ、メンタルマップに描かれた空間を捉えるために①パス、②ノード、③ランドマーク、④エッジ、⑤ディストリクトの5つの要素が用いられる。パスは道路や鉄道など

の人間が通ることのできる道筋、ノードは駅や広場などバスを繋げる主要な場所（結節点）、ランドマークは移動の際に目印となるもの、エッジは海岸や崖など人が移動しない境界となる線、ディストリクトは何らかの共通点を持ちほかと区別ができる領域のことである。これらを手がかりにして人は地理的イメージを構成するが、そこには個人の価値観や信念、文化的背景などが影響していることがメンタルマップから読み取れる。

メンタルマップによる調査に先駆けて、地域住民との相談の中で「高齢化」という地域課題が挙げられたため、高齢化をトピックにメンタルマップ調査やインタビュー調査を実施した。もちろん日本国内の農山村地域における高齢化の問題とは高齢化率や人口構成など数値的な違いに加え、影響を受けている課題も異なる。そのため、日本人学生は日本の農山村地域の高齢化の課題をベトナム人学生に提示しつつ、共通理解を深めていった。その上でメンタルマップに加えて図 12 のような質問項目を含むインタビューを行い、図 13 の結論を導き出した。このプロセスでは日本人とベトナム人の学生同士のディスカッションを重視し、質問項目の作成から結論を導くところまで、すべて学生の意見に基づいている。これは調査結果の「正しさ」もさることながら、大きなテーマを調査可能な形にブレイクダウンするトレーニングを、日本人学生とベトナム人学生とで協働させることを意図したためである。

2013 年度のプログラムで成果として挙げられるのは、日本人学生とベトナムの学生とで「ベトナム農村における高齢化」についてディスカッションを行い、日本人学生とベトナム人学生、それぞれの考えを自主的に比較したところにある（図 14）。ポイントは、単に机上のディスカッションをしたのではなく、実際に現場に足を運んで得られた現場感や調査結果などを踏まえている点であり、決して十分ではない調査日数や英語によるコミュニケーションの限界を克服して、“もう一つの共通言語”を上手に活用した結果であるといえよう。それは

▶Q1
Please draw a map of Le Xa Trung village. And write place of ① your family temple, ② well-managed family temple, and ③ unwell-managed family temple.

▶Q2
How many people came anniversary at your family temple?
How do you set up anniversary day?
10 years ago :
Now :

▶Q3
At anniversary, what are their roles?
Old people :
Adult :
Young people :

▶Q4
If young people decrease in the future in this village, do you think what problems happen at anniversary?

▶Q5
If young people decrease, what problems happen in this village?
Is your work in the field become harder than now?
Is there no people to care their temple, no people take care old people?
Do your village continue to set up the customs?

▶Q6
Can you image that in the future, this village will lost?

図 12 2013 年度調査の質問項目

After research we have some conclusion:

- We feel the numbers of people join anniversary day same between now and 10 years ago, but party become bigger.
- Some activities in traditional festival and holiday in the village lost. Example: regatta, volleyball on the women's day...
- If children decrease in this village, the works in the field don't become harder.
- Although young people decrease, temples are kept by people.
- Young people go to big city to find job, because this village don't have many job.

図 13 2013 年度調査の結論

Think of Japanese student's and Vietnamese student's "Aging" in the village

▶Japanese students

- When we walked Le Xa Trung village, we didn't feel "aging."
- After interviews, we knew Vietnamese people's thinking about aging. Not all Vietnamese feel aging.
- We feel difference Vietnamese thinkings and Japanese thinkings about aging.
- We think rural area in Vietnam have aging society in the future.

▶Viet Nam students

- Now: have aging problem
- Near future: young people continue to decrease in village
- Long future: have many ideas that
 - + the village will become the urban
 - + the village continue "aging" and lost
 - + the village continue "aging" but never lost because have old people from city comeback hometown.

図 14 「ベトナム農村における高齢化」に関する日本の学生ベトナムの学生の考え

最終的に“上手な地図”が描けたか否かではなく、地図（空間）の上でディスカッションをするということであり（写真4, 5）、今後のプログラムにも活かせるポイントである。



写真4 ディスカッションの様子 (1)
(2014年3月2日)



写真5 ディスカッションの様子 (2)
(2014年3月5日)

b. ストーリーマップの作成に向けて—2014年度プログラム

2014年度は2013年度までと同様にメンタルマップを用いた調査方法を採用したが、その一方で成果を共有することをも一つの目的として Story Map を用いた WebGIS の構築を行った。Story Map はアメリカ ESRI 社が提供する簡易型の WebGIS であり、様々な事象の流れ（ストーリー）を地図上に作成できるもので Web 上での公開も容易である。基図は ArcGIS Online の Web マップであり、これに Story Map のテンプレートと関連付けることで、ユーザ自身が独自の Story Map を作成することができる。Story Map は直感的に地域の事象を捉えることができるという特徴があり、複雑なマップ操作も必要とはしない。またテンプレートを使用することで簡単に Web アプリケーションを作成することができるため、地図とテーマに応じた事象の位置情報、そして画像や対象箇所の情報を統合的に表現することができる。

2014年度のテーマは「レーサーチェン村での30年前の生活の記憶」として図15のようなステップで演習を行った。その際には図16のような質問を行いながらメンタルマップの作成を地域住民に行ってもらった（写真6）

その結果を “Sự thay đổi trong ký ức đời sống của người dân thôn Lê Xá Trung 30 năm về trước- xã Phú Lương, huyện Phú Vang, tỉnh Thừa Thiên - Huế (トゥアティエンフエ省フーヴァン県フルオン行政村レーサー

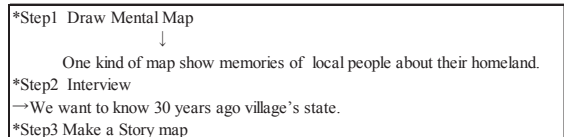


図15 2014年度調査のステップ

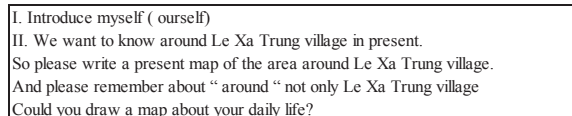


図16 2014年度調査の質問項目



写真6 2014年度のメンタルマップ調査の様子
(2015年3月3日)

チュン村の住民の記憶の中にある 30 年前からの暮らしの変化)” という Story Map として作成をした。この際に重要になるのがメンタルマップで表現された地点の地理座標（緯度経度）と、その地点を視覚的にあらわす景観である。それらの情報は、学生がその場所におもむいて GPS 付デジタルカメラを用いて取得して Story Map を構築した（図 17）。WebGIS というベトナム農村においては新しい技術を用いて自分たちの地域の過去の記憶や変化の様子が“見える化”されたことは、レーサーチュン村の人たちにとっても画期的であったようである。

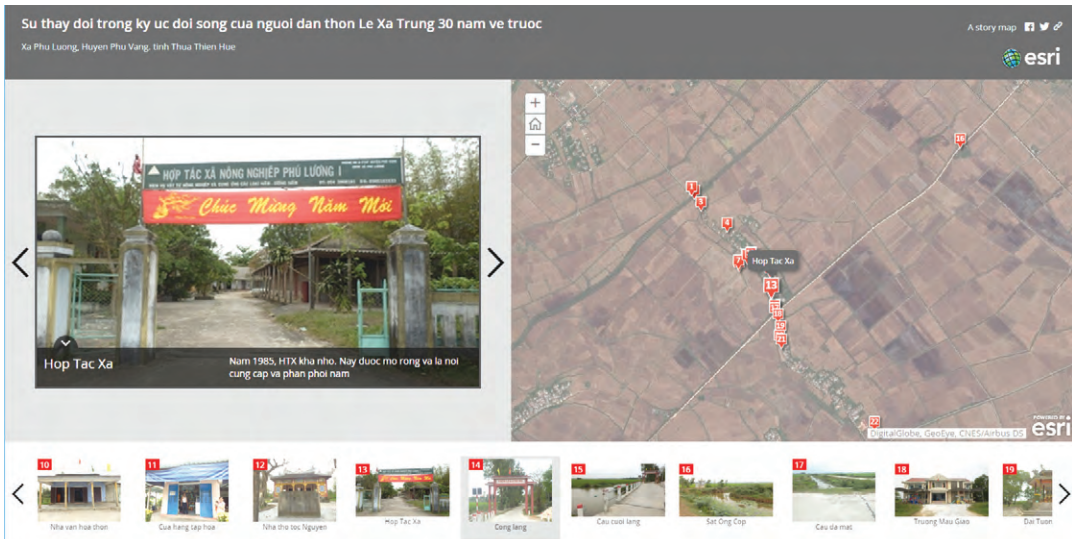


図 17 調査結果を用いて構築したレーサーチュン村の Story Map

公開 URL : <https://vn-gis-project.maps.arcgis.com/apps/MapTour/?appid=79b56634698141368b5a2abb2aff9fef>

3. テーマエクスカーションの実施

ベトナムプログラムでは調査以外にエクスカーション(巡検)を取り入れている。パイロットプログラム実施当初から 2013 年度までは調査拠点となっているフエ市内と、世界文化遺産にも指定され、かつて日本人町があったこともあり日本との関係が深いクアンナム省ホイアン市のエクスカーションを行ってきた。しかし、どちらもベトナム中部であったこともあり、地域的な視野の広がりには乏しいこと、また調査内容との関連をより高めるため、2014 年度はエクスカ

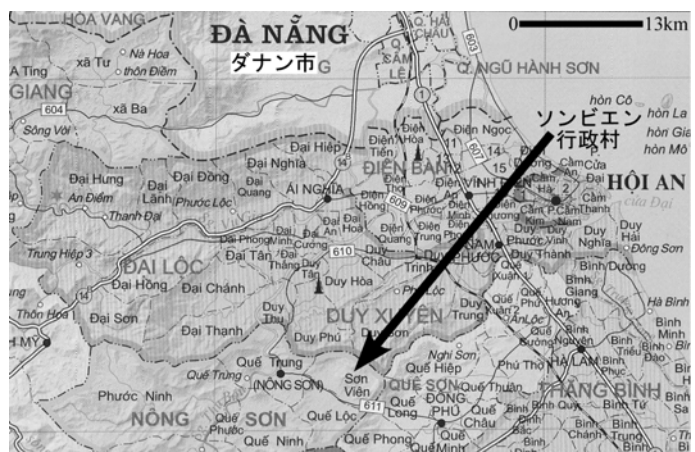


図 18 クアンナム省ソンビエン行政村位置図

出典：“Tập bản đồ hành chính 63 tỉnh, thành phố Việt Nam 2011”を加工。

ーションを変更した。まず、日本からフエ市へ向かう場合は必ずベトナム国内線に乗り換える必要があるため、その乗換の機会を利用して北部に位置する首都のハノイでのエクスカージョンを実施した。またテーマエクスカージョンは自然環境グループはトゥアティエンフエ省内のアールオイ県 (huyện A Lưới) において、集落資源グループはクアンナム省 (tỉnh Quảng Nam) ノンソン県 (huyện Nông Sơn) ソンビエン行政村 (xã Sơn Viên) において実施した。

ソンビエン行政村 (図 18) では、筒井の研究プロジェクト (トヨタ財団研究助成プログラム—社会の新たな価値の創出をめざす研究「ヴェトナム農村における住民参加型 WebGIS の構築と「コミュニティ課題の空間的見える化」に関する研究」) により、地域資源を考えるワークショップやヘルスツーリズムの発想に基づく村内周遊コースの確立、また Story Map による地域情報発信などがすでに行われている地域であり、ベトナムプログラムで活動を行っているフルオン行政村の今後を考える上で適した地域である。また立地条件は平野農村であるフルオン行政村に対してソンビエン行政村は中山間地域的な要素を持っているため比較対象としても適した地域であった。参加学生は、ソンビエン行政村人民委員会 (村役場に相当) の職員とともにモニターツアーを実施して、終了後に意見交換会を実施した (写真 7)。このエクスカージョンを通じて、ベトナムの中で同一テーマについて比較検討ができる地域を得た意義は大きい。



写真 7 ソンビエン行政村でのエクスカージョンの様子

(2015年3月7日)

Ⅶ ベトナムプログラムの意義を考える—おわりにかえて

1. 学生のフィードバックより

ベトナムプログラムでは、日本人学生およびベトナム人学生の双方にフィードバックの提出を求めており、その中から主だったものを確認しつつ意義を考えてみたい。まず「日本の時間に比べてゆっくりと流れているように私はベトナムの時間を感じました (2013 年度地域教育学科女子)」というように、ベトナムでの経験を日本での自分の経験と比べる「鏡効果」ともいふべき意義を挙げる学生が多い。また「目的が語学の向上ではない、ということが参加モチベーションを高め、結果として語学が向上できたと感じた (2013 年度地域政策学科女子)」という参加しやすさや、「英語の発音がお互い違いすぎて、辛抱強く聞き直したが、コミュニケーション力は、それはお互いに理解しようとする努力しなければならないものだと学んだ (2013 年度地域環境学科女子)」というようなコミュニケーションとは何かを感じたという意見もあった。日本人学生が調査方法を理解した上で、普段、そのような調査方法に慣れていないベトナム人学生に自分の (言語能力だけではなく) コミュニケーション力を駆使して、ディスカッションをすることでこのプログラムの意義がみいだせる。言語を超えたコミュニケーション力の開発や英語に対する再認識などにおいて効果があったといえる。

また、「観光ではいけない村での経験によって、調査の前に人との交流は日本でもベトナムでも同じ（2013年度地域政策学科女子）」という共通点、「ベトナム人学生と協力して調査を行う点がポイントで、もし日本人の調査となればベトナム人学生は通訳だが、そのような位置づけではなく、日本人学生とベトナム人学生が異なる文化や常識を調整しながら調査をすることの面白さ（2014年度地域政策学科女子）」、「地図を使った調査なので実際に書いたりしながらやると調査が成り立つことが分かった（2014年度地域政策学科女子）」など、海外調査の特徴を一部でも感じられたという感想が得られた。このような意見はベトナム人学生からも得れており、「ベトナムの学生が調査を行う際は事前にテーマを決めて、それにしたがってデータ収集、分析を行っていくが、集落社会グループの調査では現地へ赴いて、現場で何か興味深いテーマを探して調査を進めるという点が異なっていた（2013年度ベトナム人男子）」という調査方法の違いの気づき、「メンタルマップなどの新しい方法のスキルを多くトレーニングできた（2014年度ベトナム人男子）」などベトナムの大学ではあまり受けることができないトレーニングなど、“調査”をキーワードにした海外フィールド演習ならではのフィードバックを日本人学生とベトナム人学生の両方から得ることができた。

2. 今後のベトナムプログラムの展開に向けて

海外フィールド演習の取り組みはベトナムでも関心を集めている。例えば2013度は現地のテレビや新聞でも取り上げられた。一つはVTV（ベトナム国営放送）のテレビ取材であり、海外フィールド演習とあわせて開催された鳥取大学フェアの内容も含めてテレビニュースで取り上げられた。その映像はVTVのウェブサイトにおいて閲覧可能となっている（図19）。また地元新聞のトゥアティエンフエ新聞（Báo Thừa Thiên Huế）の2014年3月7日付でも半ページほどを割いてベトナムプログラムの紹介がなされた（図20）。

このように、学生実習としての性格にもとづく参加学生への効果のみならず、地域学部において国内で培ってきた地域と携わる方法などへのベトナム側の関心の高まりもあわせてみえてきている。地域とともに生きる大学という発想は、日本国内のみならず海外でも進みつつある発想である。国内・海外を問わず地域課題の解決や地域発展に向けた諸活動を、その地域の関係機関や人々と協働して実践し、その地域の再生や発展に貢献する「インターリージョナルな活動」ができる協働人材の重要性が高まっている。海外フィールド演習は地域学部の国際交流における一つの特徴である「インターリージョナル」という発想の下でさらに発展をさせていく必要がある。高齢化をテーマに農村社会を調査した学生の「私が生まれたとき日本はすでに高齢化社会だったのでその状況しかみれていなかったが、このプログラムを通して今から高齢化に直面するかもしれないベトナムの農村地域をみることができ、新たな視点を得た（2013年度地域政策学科女子）」という言葉からも分かるとおり、地域同士のインターな関係が新たな視座を学生にもたらす。

海外の「地域」を観察・比較し、その地域の諸課題や地域資源を理解することに力点をおき、現地教員による講義とエクスカージョン、そして入門的な調査を中心とした短期プログラムとしての「海外フィールド演習」の特徴を踏まえるとともに、2010年11月18日の地域学部教授会で国際交流ワーキンググループの成果報告の一部として公表された①地域学部学生および教員の国際交流推進、②地域を見つめる目の複眼化と地球地域学という発想の醸成、そして地域学部として積極的にかかわっている③北東アジア研究の推進、（図21）という海外フィールド演習の目的を今一度確認をしておきたい。

- ◎海外フィールド演習初日の様子 (2014年3月1日夜のニュース/10分30秒～)
<http://vtvhue.vn/ban-tin-thoi-su/ban-tin-thoi-su-toi/201403/ban-tin-thoi-su-toi-01032014-456959/>
- ◎海外フィールド演習報告会などの様子 (2014年3月7日夜のニュース/4分30秒～)
<http://vtvhue.vn/ban-tin-thoi-su/diem-tin-thoi-su-cuoi-ngay/201403/ban-tin-thoi-su-cuoi-ngay-07032014-459562/>
- ◎海外フィールド演習ベトナムプログラムの、農村調査の様子 (2014年3月13日夜のニュース/3分35秒～)
<http://vtvhue.vn/ban-tin-thoi-su/201403/vtv-hue-chao-ngay-moi-13032014-461335/>

図 19 ベトナム国営放送 VTV による放送アーカイブの URL

TRƯỜNG ĐẠI HỌC KHOA HỌC:

Tăng cường quan hệ hợp tác quốc tế trong đào tạo, nghiên cứu

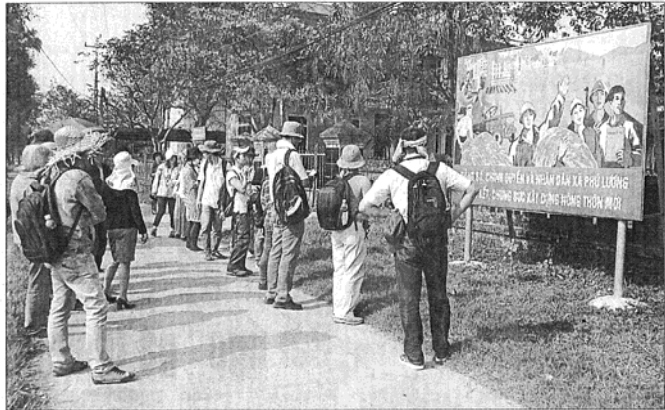
Trong xu thế hội nhập và phát triển, Trường Đại học Khoa học Huế (ĐHKH), một địa chỉ đào tạo khoa học cơ bản ưu tiên của khu vực miền Trung và cả nước đã không ngừng có những mối quan hệ hợp tác để có nhiều hơn những sản phẩm chất lượng cao phục vụ đất nước trong giai đoạn mới. Mối rộng quan hệ hợp tác với các nước trong khu vực được nhà trường đặc biệt quan tâm. TS Hoàng Văn Hiến, Phó Hiệu trưởng cho rằng: "Hợp tác quốc tế không chỉ nhằm nâng cao chất lượng chuyên môn mà còn tạo tâm nhìn xa hơn cho người học trong các mối quan hệ từ rất lớn như các dự án nghiên cứu khoa học tầm vóc khu vực... đến những chi tiết trong đào tạo thực địa của sinh viên".

Hàng năm, các mối quan hệ quốc tế của trường ngày càng mở rộng về quy mô khoa học cũng như khoảng cách địa lý, tạo nên sức mạnh trong đào tạo và NCKH. Mỗi giao lưu quốc tế giúp trường có thêm đội ngũ giảng viên tài năng sẵn sàng để có đội ngũ sinh viên ngày một chất lượng hơn... Trường đã và đang có quan hệ hợp tác, trao đổi với hàng chục tổ chức quốc tế và quốc gia, các trường đại học, viện nghiên cứu nước ngoài như Mỹ, Đức, Pháp, Trung Quốc, Nhật, Phần Lan...

dưới các hình thức như trao đổi thông tin - tư liệu, trao đổi cán bộ và sinh viên, hỗ trợ trang thiết bị và tài chính cho các dự án đào tạo, hợp tác đào tạo và NCKH... Trong đó, mối quan hệ hợp tác quốc tế với Đại học Tottori (Nhật Bản) đã đạt được những kết quả đáng khích lệ.

Tottori nằm trong hệ thống ĐH quốc gia của Nhật Bản, Trường được xây dựng năm 1949, có 4 khoa và 6 cơ sở đào tạo Sau đại học, có Trung tâm nghiên cứu đại khố cổ, Phòng thí nghiệm nghiên cứu cấu trúc và động lực của địa quyển, Bệnh viện... Với đội ngũ giáo sư, phó giáo sư, tiến sĩ các ngành, các giảng viên quốc tế cũng như trang thiết bị hiện đại, đã thu hút hàng ngàn sinh viên, học viên cao học, nghiên cứu sinh trong và ngoài nước đến từ Hàn Quốc, Trung Quốc, Thái Lan, Việt Nam, Ấn Độ, Zimbabwe... mỗi năm.

Từ năm 2009, ĐHKH Huế và ĐH Tottori đã hợp tác trao đổi cán bộ và sinh viên, đào tạo đối tác của hai trường địa phương của các tỉnh như Thừa Thiên Huế và Quảng Trị - Địa chất của ĐHKH và Khoa Khoa học vùng của ĐH Tottori. Thông qua mối quan hệ hợp tác này, đã có nhiều lượt cán bộ của trường ĐHKH được cử đi trao đổi chuyên môn, học tập kinh nghiệm tại ĐH Tottori. Nhiều đề tài, dự án được triển khai ở Việt



Nghiên cứu thực địa

Nam và Nhật Bản có sự tham gia chính của các bộ hai trường đã góp phần hiệu quả vào chương trình đào tạo cũng như giá trị dân sinh của hai quốc gia.

Ngoài ra hai trường còn cùng thực hiện các dự án như: Nghiên cứu ứng dụng của WebGIS "Trục quan không gian của các vấn đề cộng đồng ở nông thôn Việt Nam". Nghiên cứu các bản đồ hiện lưu giữ ở cấp xã vùng nông thôn chủ yếu là bản đồ giấy. Dự án sẽ giúp chính quyền cấp xã tiếp cận với công nghệ thông tin, thành lập và quản lý bản đồ ở dạng số bằng công nghệ GIS. Đồng thời dự án còn giúp người dân nâng cao khả năng về bản đồ khu vực sinh sống bằng phương pháp phổ nhớ. Hay dự án nghiên cứu sự già hóa dân số ở khu vực nông thôn miền Trung Việt Nam. Dự án này sẽ tiến hành nghiên cứu tại Việt Nam, so sánh với thực trạng ở Nhật Bản. Kết quả của

dự án sẽ chỉ ra những nguyên nhân, diễn biến và những ảnh hưởng của vấn đề trên, từ đó tìm ra các giải pháp để phát triển bền vững dân số ở khu vực nông thôn Việt Nam.

Đầu tháng ba này (1 đến 8-3-2014) hai đơn vị đã tổ chức khóa đào tạo, nghiên cứu thực địa cho sinh viên. Đến từ ĐH Tottori có 3 giáo sư, 2 học viên cao học và 8 sinh viên của khoa Khoa học vùng. ĐHKH gồm 5 giảng viên, 2 học viên cao học và 9 sinh viên của Khoa Địa lý - Địa chất. Đoàn nghiên cứu ngoài giờ giờ giao lưu, hội thảo đã có những ngày đi thực tế, cũng ăn, cũng ở với dân.

Chuyến thực địa tập trung ở khu vực nông thôn và vùng ven biển Phú Vang. Các nhà khoa học và sinh viên đã nghiên cứu đặc điểm địa hình, địa mạo và động lực hình thành, phát triển dải cồn cát ven biển Thới Thiên Huế từ cửa Thuận An đến cửa Tư Hiền. Trong đó tập

trung ở 3 khu vực chính là thị trấn Thuận An, xã Vinh Xuân và xã Vinh An. Nghiên cứu về chợ nông thôn với các hoạt động buôn bán; mối quan hệ giữa tiểu thương và người dân địa phương; quá trình sản xuất các nông sản và hàng hóa buôn bán tại chợ... Nghiên cứu điển hình được tiến hành tại chợ Phú Lương, huyện Phú Vang; đồng thời tiến hành tham quan, tìm hiểu một số chợ trong khu vực lân cận như chợ Điện Đại, chợ Vinh Thành. Nghiên cứu về tài nguyên và cảnh quan nông thôn với sự tham gia của cộng đồng.

Trong quá trình nghiên cứu thực địa, đoàn cũng làm việc, trao đổi với người dân và chính quyền địa phương về những vấn đề dân sinh như môi trường, nguồn nước... Chương trình nhằm góp phần nâng cao kỹ năng nghiên cứu thực địa cho sinh viên, tăng cường quan hệ giao lưu, hợp tác, sự hiểu biết

giữa sinh viên với người dân địa phương, giảm thiểu phương pháp học theo lối cũ trường...

Theo đánh giá của lãnh đạo hai bên, hoạt động hợp tác trong lĩnh vực đào tạo có triển khai nghiên cứu thực địa như trên đã mang lại nhiều lợi ích trong công tác đào tạo của hai trường. Đồng thời đây cũng là cơ hội giúp cán bộ giảng viên và sinh viên Trường ĐHKH tiếp cận, học hỏi kinh nghiệm đào tạo, phương pháp nghiên cứu tiên tiến của các giáo sư Nhật Bản mang đến. Hoạt động này cũng tạo được mối quan hệ bền vững và sự hiểu biết sâu rộng hơn về nền văn hóa đa dạng và đậm đà bản sắc của hai quốc gia. Đây là cơ sở vững chắc cho việc thúc đẩy các hoạt động hợp tác trong lĩnh vực đào tạo và NCKH giữa hai trường, góp phần không định uy tín và nâng cao chất lượng đào tạo của Trường ĐHKH Huế.

Bài và ảnh: Phước Châu



Làm việc theo nhóm trong phòng

図 20 トウアティエンフェ新聞の記事

(2014年3月7日付)

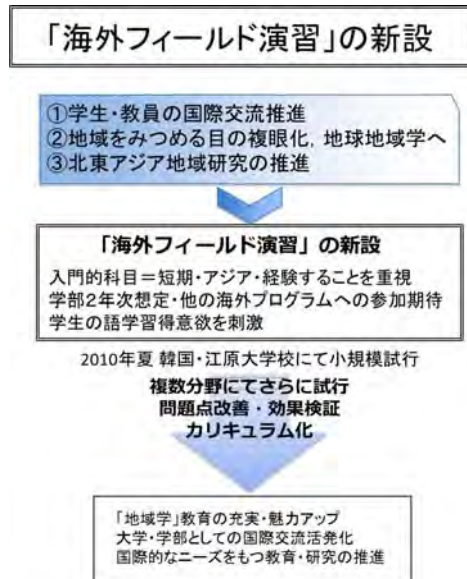


図 21 海外フィールド演習の意義

付記

海外フィールド演習ベトナムプログラムの実施に際しては、文部科学省グローバル人材育成推進事業および日本学生支援機構留学生交流支援制度（ショートビジット）「地域学アプローチを備えたインターリージョナルなアジア人育成プログラム」による支援を得た。

引用文献

- 池内萌加・伊吹彩花・遠藤晴矢・梶山隼人・佐野円香・田子直樹・高橋聖・星野和真（2015）：白兔海岸の地層と地形のなりたち：於岐ノ島と気多岬の検討から、『地域調査実習報告書（鳥取大学地域学部地域環境学科）』15：51-58.
- 菅森義晃・池内萌加・佐野円香・田子直樹・星野和真・伊吹彩花・梶山隼人・高橋聖・遠藤晴矢・小玉芳敬（2015）：鳥取県東部白兔海岸淤岐ノ島と気多岬に露出する新第三系の岩相と火山岩の K-Ar 年代『日本地質学会第122年学術大会講演要旨』：236.
- 田川公太郎・永松 大（2010）：韓国江原大学校における「海外フィールド演習」のこころみ、『地域学論集』7：323-336.
- 筒井一伸・仲野 誠・永松 大・グエン クアン トゥアン・ブイ ティ トゥ・レ ディ トゥアン（2012）：ベトナムにおける「海外フィールド演習」の成果と課題―フエ市でのパイロットプログラムの実施を通して―、『地域学論集』9：1-21.
- 筒井一伸・片垣 亜弥子・仲野 誠・小玉 芳敬・ブイ ティ トゥ・レ ディン トゥアン・チュオン ディン チョン（2013）：効果的な「海外フィールド演習」の実施に向けた課題：ベトナム・トゥアティエンフエ省でのパイロットプログラムを通して、『地域学論集』10：63-83.

（2015年10月2日受付，2015年10月6日受理）